序　文

桂　紹隆（龍谷大学アジア仏教文化研究センター長・龍谷大学文学部教授）

龍谷大学アジア仏教文化研究センターが推進する「アジア諸地域における仏教の多様性とその現代的可能性の総合的研究」にとって最も重要な課題は，それぞれ異なる地域を研究対象とする三つのユニットの間で問題意識を共有し，共通の目的のために各ユニットの研究，各個人の研究を遂行していく体制を形成することであった。

全体研究会は，上記の課題を解決するために設定されたものである。2010 年度には花園大学の佐々木閑先生に，律文献に見られる「破僧」定義の変化が，仏教教団の教義的拘束の無化を前提とし，異なる教義を有する多数の仏教部派の登場を可能にしたという年来の主張を文献にもとづき論理的に実証して頂いた。さらにオウム真理教に言及して現代の日本仏教が直面する問題も指摘して頂いた。また，大谷大学の木村宣彰先生には，中国仏教史における「崇仏」「排仏」の記録が現実における仏教の衰退と隆盛を逆照射していることを文献的に立証された上で，明治の「排仏棄釈」を経験した近代日本仏教にも言及され，現代の日本仏教が抱える問題に鋭いメスを入れて頂いた。詳しくは昨年度の全体研究会プロシーディングスを参照されたい。

以上のように，佐々木先生には「仏教の多様性」を可能とした根本原理を明らかにして頂き，木村先生には中国仏教における多様性の実態を紹介して頂いた。両先生が現代日本仏教のあり方に強い関心を持ち，それぞれの立場から新鮮な視点を与えてくださったことは望外の喜びであった。

2011 年度の共通テーマとして「エンゲイジド・ブディズム」を選択した。現代のインドの仏教，東南アジアの仏教，さらに欧米の仏教を見渡すと，そこに通底するキーワードとして「エンゲイジド・ブディズム」が浮かび上がってきたからである。「エンゲイジド」という語は，何かに「かかわること」を意味するが，ここでは本来出世間的・脱世俗的な宗教である仏教が，世間や世俗に，社会活動や政治活動や経済活動に積極的に参加することを意味するのであろう。しかし，何らかの形で世間との関わりが全くない仏教を探すのも容易ではない。その意味ですべての仏教は「エンゲイジド・ブディズム」であると言っても過言ではない。ここにわれわれは「仏教の現代的可能性」のひとつを見いだしたのである。

本年度は，まず我が国におけるエンゲイジド・ブディズム研究の先駆者である阿満利麿先生に二度にわたって導入的な講義をしていただいた。次に，2011 年度の第 28 回庭野平和賞の受賞者であり，タイにおけるエンゲイジド・ブディズムの指導者でもあるスラック・シワラック氏から，投獄や海外脱出など自らの波瀾万丈の実体験にもとづく，タイにおけるエンゲイジド・ブディズムの実態を聞かせて頂いた。さらに，武蔵野大学のタナカ先生にはアメリカ仏教の現状を報告して頂いた。本プロシーディングスには，出版のご許可を頂いたタナカ先生のご講義の全容と，その他三回の講義の概要を収録した。

最後に，本プロジェクトのユニット１「南アジア地域班」のサブユニット３の中村尚司・嵩満也両教授は，スリランカとタイの仏教の現状を長年フィールドワークにより調査してこられたが，その当然の結果としてエンゲイジド・ブディストたちとの交流も深めてこられた。昨年 10 月 26 日～29 日にブダガヤで開催された「エンゲイジド・ブディストの国際ネットワーク」（INEB）主催の国際学会（テーマ「仏教の未来：個人の覚醒から地球の変革へ」）にお二人は出席されている。またその内容は，アジア仏教文化研究センター公募研究員のジョナサン･ワッツ氏が，「国際エンゲイジド･ブディズム･ネットワーク―ブッダガヤ定期大会の報告ー」というタイトルでユニット１の研究会で報告している。中村先生も「スリランカにおけるアナガーリカ･ダルマパーラの活動と後世のエンゲイジド･ブディズム」という研究発表をユニット１の研究会で行っている。

以上のように，少しずつではあるが，着実にエンゲイジド・ブディズムの研究を蓄積してきた。来年度もまた，同様の趣旨の全体研究会を開催していく所存である。